

生きていく上で欠かすことができない「食」を未来につなぐ、私たちのまちの新規就農者や農業後継者などを紹介します。

霧島の農業をミライへ



鮫島 和行さん(45) 国分出身、国分在住。
就農9年目。夢源ファーム代表。
営農類型：施設野菜 営農面積：36a 経営作物：果菜類(トマト)



夢源ファームの
Instagramは
こちら



「去年8月の大雨で畑が冠水。途方に暮れて、一時は農業を辞めようかと思いました」。赤や黄色に色付いたトマトに目を細めながら、当時の心境を話す鮫島和行さん(45)は、隼人町内山田でトマトを栽培しています。

国分広瀬で生まれ育った鮫島さんは、高校卒業後、サラリーマン生活を経て国分で居酒屋を営んでいましたが、再開発による立ち退きを機にトマト農家の道へ。「居酒屋で仕入れたトマトの味に感動したのがきっかけです。その生産者の方に弟子入りし、農業のノウハウを学びました」と振り返ります。

「肥料にはこだわりがあり、種類や成分、配合などを考えながら試行錯誤を重ねています。トマトはものを言わないので、そこが難しくもあり、やりがいでもあります。自分がおいしいと納得できるものを消費者に届けたいですね」と話す鮫島さん。もう辞めようか。かつての葛藤を乗り越え、今日もトマト作りに真摯に向き合っています。

納得のいく「うまいトマト」を食卓へ

「料理なら使う調味料などで味の想像はつくんですが、農産物は収穫するまで分からない。居酒屋とは違った難しさがありますね」と鮫島さんは笑顔で話します。

桃太郎、アイコといったおなじみの品種に加え、今年から作り始めた「プチぶよ」という

ミニトマトは、まるでサクランボのように柔らかく糖度も高いので、トマトが苦手な人にもお薦めです。

市内のAコープやハピネス、畑の直売所(月・水・木・日曜、午後1時~5時ごろまで)などで販売しています。

